

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）

研究期間：2018～2023

課題番号：18KT0031

研究課題名（和文）茶道の相互行為論 - 茶席における会話と所作の分析から

研究課題名（英文）Social Interaction in Tea Ceremony: Analysis of Conversation and Behavior in Tea House

研究代表者

木村 大治 (Kimura, Daiji)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・名誉教授

研究者番号：40242573

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、茶道の点前を対象とし、その「定型性」のもつ相互行為的な意味を探ることを目的とした。研究方法は、茶道の稽古の画面の動画撮影、および学習者の内観的記述の分析などである。その結果、茶道の点前は定型性を基盤としてはいるものの、実際にはそこからのさまざまな「ずれ」が存在し、それらを用いて「あそぶ」ことが茶道の価値づけに中心的な意味を持っていることが明らかになった。また、茶席内のさまざまな象徴表現による「呼び起こし」、席の参与者(亭主・客)間の「グルーブ」とも呼びうる身体的共鳴の重要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代社会において、「定型性」は「創造性」の反意語であり、またシャノン流の情報理論においては「冗長性 (=反-情報)」であるとされるなど、ネガティブな意味で捉えられることが多い。本研究は、一般には定型性の極致であるとみなされる茶道の点前を対象とし、そこに起こる「ずれ」に着目することによって、定型性の新たな価値づけをおこなった。また、そこで用いたビデオ分析という方法論は、伝統芸能の相互行為論的研究に新しい画期をもたらすものである。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to explore the interactive meaning of the "formality" of tea ceremony practice. The research method consisted of video recording of tea ceremony practice and analysis of learners' introspective descriptions.

As a result, we could clear that although the tea ceremony is based on a fixed form, there actually exist various "deviations" from this form, and that "playing" with these deviations has a central meaning in the value of the tea ceremony. The importance of "evocation" through various symbolic expressions, and the physical resonance between the participants (host and guests) in the tea ceremony, which could be called "groove", was also clarified.

研究分野：人類学，コミュニケーション論

キーワード：茶道 相互行為 形式性 会話 身体動作 構成的規則 象徴装置 身体的共鳴

### 1. 研究開始当初の背景

現代社会において、行為の「定型性」はいわば「創造性」「オリジナリティ」の反意語と捉えられており、またシャノン流の情報理論においても「冗長性(=反-情報)」であるとされるなど、ネガティブな意味を付されることが多い。しかし茶道など伝統芸道においては、「型」と呼ばれる定型性はその中核をなす概念である。「型」を通じて「定型性」の持つ意味を捉え直すことは行為論にとって重要な課題である。

一方、従来の茶道研究は、芸能史研究や美学、あるいは哲学・宗教の立場からの研究がほとんどであり、茶席の場において何が生起しているのかに着目した研究はほとんどなかった。

### 2. 研究の目的

上記のような背景のもとで、本研究は、茶道を対象として「定型性」の持つ意味と、そこからいかにして「茶道を修する楽しさ」が生成するのかというプロセスを相互行為論的に明らかにすること目的とした。

一方、茶道研究においては、動作の行為分析に類する研究はほとんど存在していなかった。茶道成立以来書かれてきたさまざまな茶書、あるいは茶道に関する論考を行為論の立場から見直すことは、茶道観を一新するきっかけになると期待される。

### 3. 研究の方法

本研究においては、以下に記す3つの視点から茶席の相互行為を分析してきた。

- (1) 構成的規則: 言語哲学者サールは、規則を「統制的規則」と「構成的規則」に分類した。前者のような、行為を「何々すべし」「何々すべからず」と統制する規則とは違い、後者は「 $x \times$ とみなす」という形の規則である。たとえばサッカーのゲームは、無闇にボールを蹴るのではなく、ルールによって束縛されることではじめてプレイとして成立する。茶席においても、一見束縛的なさまざまな規則があるからこそ、そこでなされる行動が行為として意味を持ってくると考えられる。
- (2) 象徴表現: 茶席には、茶室の作りに始まり、茶碗、掛け軸、棗...といった膨大な数の「象徴資源」が存在する。また、定型的所作にもそれぞれの意味づけがなされている。そういった象徴たちは、本当に言われるままの「象徴値」を持っているのだろうか。人類学者スペルベルの提起した象徴表現(symbolisum)に関するこの問いを手がかりに、茶席における「提示」と「なにごとかを感じる」との関係について考察する。
- (3) 身体的共鳴: 茶席で行為する亭主と客は、規矩に従い定まった動作をしており、そして「相手がどのような動作をするか」ということもまたよくわかっている。そのような状況下で相手の経験に乗り込むことで、ある種の他者理解が達成されたと感じられることがある。この状況は、人類学者マリノフスキーの言う「ファティック・コミュニオン」、あるいは「身体的共鳴」といった概念で捉えることができるだろう。

以上の視点において分析をおこなうため、具体的には以下のような研究方法を取った。

ビデオ分析: 大学茶道部の学生諸君に協力を求め、計4回にわたって点前稽古の場を設け、それをビデオで撮影した。カメラは通常のものに加え、相互行為をつぶさに観察するため360度カメラも併用した。撮影されたビデオは、分析ソフトELANを用いて分析をおこなっている。また、研究の前半ではコロナ禍によってこのような撮影が不可能であったので、研究代表者の木村が参加している毎月の点前稽古で、自分自身の稽古の場面を撮影して分析に供した。



点前稽古の動画収録 (360度カメラにより撮影)

事後インタビュー，振り返り：点前稽古の終了後，参加した学生諸君に，自分の点前あるいは他者の点前の感想，何が楽しかったか等のインタビューをおこなった。また代表者自身も，点前稽古の終わったあとにその都度，点前の感想を記録した。これらビデオ撮影，事後インタビューのデータは科研費メンバーで共有して研究会の場を設け，分析，討論をおこなった。

茶道の古典との照らし合わせ：茶道の歴史に詳しい研究分担者の美濃部を中心に，古くから茶道で言われている箴言などと，本研究で明らかになった事柄の照らし合わせをおこなった。

他分野との共同研究：研究分担者の喜多はヨガを中心とする身体論，梶田は情報工学，錦織は医学教育の分野から，茶道の定型性の持つ意味を考察した。また京都市立芸大の「状況のアーキテクチャー」チーム，千葉大学の伝康晴氏らの「芸道・武道研究」チームとも共同研究をおこなった。



点前稽古の動画収録(左は代表者・木村)

#### 4. 研究成果

##### (1) 構成的規則に関して

事後インタビューからは，「点前稽古で，型を忘れずにきちんと点前ができたのがよかった」といった感想が当然聞かれた。これは，型を覚え，型にはまることに関する喜びであると言ってよい。

一方，「今回はこういう動作の工夫をしてみた」「先輩のこれこれの所作がいいなと思って，それを真似してみる」といった過去の自分や他者との違いに言及する感想もしばしば聞かれた。また，ビデオに記録された稽古における教示の中ではしばしば，「重いものは軽く，軽いものは重く扱う」「肘を張って大木を抱えるような気持ちで点前をする」「切り柄杓では決めるところを決める」といった，「わざ言語」的な言い回しが頻出する。そういった「わざ言語」の多くは，動作を日常的な「楽な」体の使い方から外すことによって，緊張感や重々しさを表現することを目指したものだと言える。このように，型を型どおりおこなう段階の先には，定型性を基盤としつつも，そこからの「ずれ」によって何事かを表現する段階が存在すると言える。ビデオ分析から，そういった「ずれ」には以下の3種類が区別できた。

- 日常的な「楽な」所作とのずれ
- 他者のおこなう所作とのずれ
- 過去の自分の体の使い方とのずれ

は点前などの動作における緊張感，「決める」感じなどを表出できる。は定型的でありつつも，「その人らしい」点前，という印象を与える。また によって，自身の点前に関する工夫と進歩を感じることができる。

このような「ずれ」は，「あそび」と呼ぶこともできる。サールの議論のように，「あそび」が成立するためには構成的規則が必要なのだが，規則を基盤として「あそべる」ようになるということこそが，「型にはまる」段階の次に訪れる，茶道の稽古における達成であると考えられる。「型にはまる」段階から「型を使ってあそぶ」段階への進展は，ベイトソンの言う「論理階型(logical types)」の段差に対応すると考えることができる。すなわち，「そのもの」に随順しそれにこだわる段階から，そのものたち自身よりもそれらの「差異」に気づくことへの跳躍である。その跳躍を成し遂げることが，茶道の稽古における主要な達成であると考えられる。

本研究では，収録に協力していただいた学生さんの，点前の学びははじめから習熟に至る過程を続けて記録し，こういった「あそび」が獲得されるプロセスを具体的に明らかにすることを目指していた。しかし残念ながらコロナ禍によって，そのような連続的な記録を取ることができなかった。この点については今後の課題としたい。

## (2) 象徴表現に関して

点前稽古の録画においては、茶席の中の「もの」や所作たちに関する、百科全書的知識と呼ぶべき情報が提示されていた。そういった知識を学習していくのが、茶道を学ぶ上での一つの喜びであると言える。しかしスペルベルの論じるように、そういった象徴の意味を額面通りに受け止めるというのは人類学においてはすでに古い考えになっている。むしろ探究すべきは、それらの象徴表現がいったいどういった感興や思考を「呼び起こして(evocate)」いるのか、という点である。そこでは、茶席の中にあるさまざまな「もの」の持つ「もの性(マテリアリティ)」が主要な役割を果たしていると考えられる。この点については、収録された動画や会話から明らかにしていくべきで、マテリアリティに関する論考がある人類学者、村津蘭氏に協力を求めているところだが、まだ十分に有効な分析視点を得るに至っていない状態である。

一方、儀礼に置ける象徴表現が「本当に表わしている」と思われているものが実は無くてもいいものであるとするなら、象徴表現とはいわば空虚へと内破しないように無理やり外に向けて「張られている」存在であると言える。そういった外向きのエネルギーは、しばしば儀礼をエスカレートさせる。実際、茶席の録画の中でも、経験の浅い学習者はしばしば過剰に型にはまろうとする傾向が見て取れた。本研究ではその傾向を「過剰儀礼化」と名づけたが、これは今後の芸道・儀礼研究において有効な概念であると考えられる。

## (3) 身体的共鳴に関して

(1)で述べたように、茶席では定型を基本としつつも、「その人らしい」点前、といった感覚が共有される。神経生理学的に言うと、そこでは「他者のある行為を見る」ことと、「自分がその行為をする」ということを重ね合わせる「ミラーニューロン」が活発に働いているのだと考えられる。ミラーニューロンの働きは、舞蹈研究などにおいても注目されており、今後の研究の展開が期待される。

そのような席中の亭主・客の他者理解の感覚が重なり合うと、その席が独特の、一回性のものであると感じられてくる。茶道で古くから言われている「一座建立」とか「一期一会」という事態であろう。茶席の収録に立ち会った音楽人類学者の矢野原佑史氏は、「茶席は超低速のグルーブ」だ、という感想を述べたが、まさに音楽で言うグルーブとかスウィングといった事態が茶席内でも起こっているのだと考えられる。まったく型どおりの(ロボットのよう)点前においては、そのような感覚は起こるわけではなく、そこでは(1)で述べた「ずれ」がうまく作用してグルーブを作り出しているのである。茶席動画の分析から、そのような「ずれ」の感覚を明らかにしようと努力したが、残念なことに、何を手がかりに、会話分析においておこなわれている連鎖分析のような手法を適用したらいいのかがまだよくわかってない段階であり、この点については今後の重要な課題としたい。

以上のように、まだ道半ばの部分も多い本研究の結果であるが、今までやられてこなかった、茶道の行為論的分析の端緒を開くという意義は十分にあったと考えている。また、この後のページに記したように、国内外での論文出版、学会発表、ホームページ公開も積極的におこなっており、今後その成果をまとめた書籍を出版していく計画である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 木村大治	4. 巻 6
2. 論文標題 束縛から遊びへ 茶道の稽古における『型』と論理階型の上昇	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築	6. 最初と最後の頁 32-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 美濃部仁	4. 巻 16
2. 論文標題 わび茶と間文化性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文明と哲学	6. 最初と最後の頁 8-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hitoshi Minobe	4. 巻 -
2. 論文標題 The Dialectical Universal	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tetsugaku Companion to Nishida Kitaro	6. 最初と最後の頁 57-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sayaka Oikawa, Junko Iida, Yasunobu Ito, Hiroshi Nishigori	4. 巻 22
2. 論文標題 Cultivating cultural awareness among medical educators by integrating cultural anthropology in faculty development: an action research study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC Medical Education	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 木村大治	4. 巻 60・61
2. 論文標題 『なぜお茶を始めたのですか?』 - 久松先生の問いと茶道科研 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心茶	6. 最初と最後の頁 52-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyachi J., Iida J., Shimazono Y., Nishigori H.	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 A collaborative clinical case conference model for teaching social and behavioral science in medicine: an action research study.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Medical Education	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村大治	4. 巻 1
2. 論文標題 茶道の点前における「型」と「ずれ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会言語科学会第45回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美濃部仁	4. 巻 34
2. 論文標題 クリステン・スーラック著 廣田吉崇監訳 井上治・黒河星子翻訳『MTMJ 日本らしさと茶道』書評	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茶の湯文化学	6. 最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Mori Tetsuro, Minobe Hitoshi, and Steven Heine	4. 巻 なし
2. 論文標題 Modern Zen Thinkers: Suzuki Daisetsu, Hisamatsu Shin'ichi, and Abe Masao	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Oxford Handbooks Online	6. 最初と最後の頁 Online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/oxfordhb/9780199945726.013.15	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Hitoshi Minobe	4. 巻 46
2. 論文標題 Fichte und Nishida: Das Absolute und das absolute Nichts	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Fichte-Studien	6. 最初と最後の頁 115-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nishigori H, Suzuki T, Matsui T, Busari J, Dornan T.	4. 巻 4(3)
2. 論文標題 A two-edged sword. Narrative inquiry into Japanese doctors' intrinsic motivation	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Asia-Pacific Scholar	6. 最初と最後の頁 24-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 美濃部仁	4. 巻 16
2. 論文標題 わび茶と間文化性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文明と哲学	6. 最初と最後の頁 8-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Daiji KIMURA
2. 発表標題 "Shu, Ha, Ri (Obey, Break, Separate)": Logical Types in Tea Ceremony Learning
3. 学会等名 18th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hitoshi Minobe
2. 発表標題 Der Status des Ich als Individuum in Bezug auf die Vernunft in Fichtes Wissenschaftslehre nach 1801/02
3. 学会等名 XI. Internationaler Fichte-Kongress 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kimura, Daiji
2. 発表標題 Well-modulated Bodily Movements in the Japanese Tea Ceremony (Sado)
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村大治
2. 発表標題 束縛から遊びへ: 茶道の稽古における『型』と論理階型の上昇
3. 学会等名 公開シンポジウム トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (第6回) (招待講演)
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 木村大治
2. 発表標題 茶道の点前における「型」と「ずれ」
3. 学会等名 社会言語科学会第45回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 池田喬、合田正人、志野好伸、美濃部仁	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 374
3. 書名 何処から何処へ：現象学の異境的展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>連続Webセミナー「茶道の行為論」, 「心茶セミナー」  <a href="https://www.youtube.com/channel/UCmpykDpzSLMU8MVC-SSG-kQ">https://www.youtube.com/channel/UCmpykDpzSLMU8MVC-SSG-kQ</a></p> <p>連続Webセミナー「茶道の行為論」(8回分公開済み)  <a href="https://www.youtube.com/channel/UCmpykDpzSLMU8MVC-SSG-kQ">https://www.youtube.com/channel/UCmpykDpzSLMU8MVC-SSG-kQ</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	喜多 千草  (Kita Chigusa)  (10362419)	京都大学・文学研究科・教授    (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	美濃部 仁  (Minobe Hitoshi)  (50328960)	明治大学・国際日本学部・専任教授    (32682)	
研究分担者	梶田 将司  (Kajita Shoji)  (30273296)	京都大学・学術情報メディアセンター・教授    (14301)	
研究分担者	錦織 宏  (Nishigori Hiroshi)  (10463837)	名古屋大学・医学系研究科・教授    (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関